自己注目と抑うつおよび不安との関連¹

田中誠一 厚生労働省 佐藤寛 宮崎大学 境泉洋 徳島大学
坂野雄二 北海道医療大学

The relationship among self-focused attention, depression, and anxiety

Seiichi Tanaka (Ministry of Health, Labor and Welfare), Hiroshi Sato (University of Miyazaki),
Motohiro Sakai (University of Tokushima), and Yuji Sakano (Health Sciences University of Hokkaido)

Self-focused attention is considered to be a cognitive characteristic of depression. However, some articles report that self-focused attention is also related to anxiety. This study examines the differential relationships of self-focused attention to depression and anxiety. The Preoccupation Scale, Self-rating Depression Scale, and State-Trait Anxiety Inventory T-Form were administered to 454 undergraduate students. The results showed a partial correlation between self-focused attention and anxiety that was significant while controlling for depression, but the partial correlation between self-focused attention and depression was not significant while controlling for anxiety. In addition, the results of an analysis of covariance structure revealed that self-focused attention was related to anxiety, and the relationship between self-focused attention and depression was due to the mediating effect of anxiety. Therefore, it was suggested that self-focused attention appears to be a significant component of cognitive operations for anxiety, but not for depression.

Key words: self-focused attention, depression, anxiety, cognitive operation, attentional bias.

The Japanese Journal of Psychology
2007, Vol. 78, No. 4, pp. 365-371

現代社会において、抑うつは最も主要な精神保健上の問題の一つである。一般の健康な人においても、抑うつ問題は強い悲哀感や活動性の低下といった症状によって、日常生活に重大な支障をきたす原因となる (Clark & Fairburn, 1997 伊豫監訳 2003)。このような抑うつ問題に対処するために、心理学の領域からも抑うつを理解するためのさまざまな理論的枠組みが提唱されているが、その中でも抑うつ認知理論 (Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1979 坂野監訳 1992; Ingram, 1990) に関する研究は、特に大きな貢献を果たしてきた (丹野, 2001)。

抑うつ認知理論では、認知構造、認知操作、認知結果とそれぞれ呼ばれる認知のレベルを仮定している (Ingram, 1990)。認知構造とは、個人の中である程度一貫して観察される考えや行動、感情のもととなっている態度や信念体系を指す。また、認知操作とは、外部からの情報を変換する認知的な過程のことであり、注意や記憶、解釈といったプロセスが含まれる。そして、認知結果とは、認知操作や認知構造が外部の情報

と相互作用した結果として生成される具体的思考やイメージ、言語表象などである。このように異なったレベルの認知的変数を想定することによって、抑うつが生起・維持される過程をより詳細に理解し、それぞれの認知レベルに対して働きかける多様な治療アプローチを開発することが可能になる (Wells & Matthews, 1994 箱田・津田・丹野監訳 2002)。

坂本 (1998) は、以上に述べた三つのレベルの中でも、認知構造から認知結果に至る経路である認知操作の役割を特に重視する、自己注目と抑うつとの3段階モデルを提唱している。坂本 (1998) のモデルでは、基本的な要素については従来の抑うつ認知理論の枠組みを踏襲しながらも、自分自身のネガティブな情報に注意を向けるという認知操作、すなわち自己注目が持続することによって、抑うつが維持されるという主張がなされている。このようなモデルを裏づける根拠として、坂本 (1997) は自己注目の持続しやすさを測定する自己没入尺度と抑うつ尺度との間に中程度の正の相関があることを報告している。さらに坂本 (1997) は、抑うつ傾向の高い人が、自己注目を実験的に高めることによってネガティブな感情を喚起しやすいことを明らかにしている。これらのデータからは、自己注目が抑うつ生成・維持に関与する主要な要因である

Correspondence concerning this article should be sent to: Hiroshi Sato, University of Miyazaki, Gakuenkibanadai-Nishi, Miyazaki 889-2192, Japan (e-mail: hsato@cc.miyazaki-u.ac.jp)

¹ 本論文は、第一著者が早稲田大学在学中に執筆したものであり、公人としてではなく一私人としての研究論文である。

とする坂本 (1998) の主張が妥当性を持つと考察することができる。

しかしながら, Beuke, Fischer, & McDowall (2003) は, 抑うつと認知的変数との関係を検討する際には, 不安の影響が介在する可能性を考慮して慎重に結論づける必要があることを指摘している。多くの先行研究において, 抑うつと不安の間には強い関連があることが指摘されている (Clark & Watson, 1991)。このことから, Beuke et al. (2003) は, ある認知的変数と抑うつとの相関関係が見かけ上は示されたとしても, その認知的変数は実際には不安と関連しており, 抑うつとはあまり関連がない可能性があるとして述べている。このような指摘が的を射ていた例としては, 抑うつと注意バイアスの関連についての研究が挙げられる。Gotlib & Cane (1987) や Gotlib & McCann (1984) は, 抑うつと強さとネガティブな刺激に対するストループ干渉効果の大きさには正の関連があることを報告している。しかしながら, これらの研究では不安の影響について何ら検討は加えられていない。一方, Mathews & MacLeod (1985) は, 抑うつと不安のいずれも測定した上で, ストループ干渉効果との関連について検討している。その結果, 不安とストループ効果との偏相関は抑うつを統制しても有意であるのに対し, 抑うつとストループ干渉効果との偏相関は不安を統制すると有意ではないことが明らかにされた。以上の結果から, ストループ課題によって測定される注意バイアスは不安と関連するものであり, 抑うつとは関連がないと結論づけることができる。このように, 抑うつに関連する認知的変数を検討する上で, 不安の影響を考慮しないことは誤った結論を導き出すことにつながる可能性がある。

自己注目と不安の関連については, 既に数多くの研究において検討が行われている。例えば, 自己注目は, パニック障害 (Clark, 1986) や社会恐怖 (Clark & Wells, 1995) の認知モデルにおいて, 不安を引き起こし, 維持させる認知操作であるとされている。さらに, 自己注目を高める操作を行った実験的研究によって, 自己注目はテスト不安 (Deffenbacher, 1978) や単一恐怖 (Carver, Blaney, & Scheier, 1979), パニック障害 (Rachman, Levitt, & Lopatka, 1988) といった, さまざまな不安を喚起することが明らかにされている。その他にも, 自己注目は広場恐怖 (Goldstein & Chambless, 1978) や全般性不安障害 (Craske, Rapee, Jackel, & Barlow, 1989) などの不安障害の維持と関連があることが指摘されている。以上の諸研究から, 自己注目は不安と関連の強い認知操作であると考えられることもできる。

このように, 自己注目は抑うつに関連する認知操作であるとされている一方で, 不安との関連を指摘するデータも報告されている。しかしながら, これらの先

行研究では抑うつか不安のどちらか片方しか測定されておらず, 現状では自己注目が抑うつと不安のいずれに関連する認知操作であるのかという点について結論づけることは困難である。そこで本研究では, 抑うつと不安を同時に測定し, 相互の共変関係を考慮に入れた分析を行った上で, 自己注目が抑うつと不安のいずれに関連する認知操作であるか検討を行うことを目的とする。

方 法

調査対象および手続き 首都圏の私立大学に在籍する大学生 454 名 (男性 198 名, 女性 256 名, 平均年齢 21.02 ± 2.83 歳) を対象に, 質問紙調査を実施した。質問紙は講義の時間を利用して配布し, 一部は講義時間内に一齐に実施され, 一部は個別に持ち帰って後日回収された。記入漏れや記入ミスのあった回答を除き, 有効回答者 423 名 (有効回答率 = 93.8%, 男性 179 名, 女性 244 名, 平均年齢 20.78 ± 2.92 歳) を分析対象とした。

調査材料

自己注目の測定 自己注目の測定には, 自己注目の持続しやすさを測定する自己没入尺度 (坂本, 1997) を用いた。この尺度は 11 項目から構成されており, 信頼性と妥当性が確認されている。回答は, “1. 全く当てはまらない” から “5. かなり当てはまる” の 5 段階で評定を求めた。

抑うつ測定 抑うつ測定には, Zung (1965) によって作成された Self-rating Depression Scale (以下 SDS とする) の日本語版 (福田・小林, 1973) を用いた。SDS は, 20 項目からなる尺度であり, 信頼性と妥当性を満たすことが分かっている。回答は, “1. ないかたまたま” から “4. ほとんどいつも” の 4 段階で評定を求めた。

不安の測定 不安の測定には, Spielberger, Gorsuch, & Lushene (1970) によって開発された, State-Trait Anxiety Inventory (以下 STAI とする) の日本語版 (岸本・寺崎, 1986) から, 特性不安尺度 (T-FORM) を用いた。STAI-T は, 20 項目から構成されており, 信頼性と妥当性が保証された尺度である。回答は “1. ほとんどない” から “4. いつもある” の 4 段階で評定を求めた。

結 果

自己注目と抑うつ・不安の相関, 偏相関および重回帰分析

自己没入尺度の合計得点を自己注目得点, SDS の合計得点を抑うつ得点, STAI の合計得点を不安得点とし, これらの 3 変数間の相関係数をそれぞれ算出し

Table 1

Correlation and partial correlation coefficients among self-focused attention, depression, and anxiety ($N=423$)

	Depression	Anxiety
Self-Focused Attention (Simple Correlation)	.02 ^{a)} (.47)*	.45 ^{b)} *** (.62)***

Note. *** $p < .001$, * $p < .05$ ^{a)} Controlled for anxiety^{b)} Controlled for depression

た。その結果、不安得点と自己注目得点との間にやや強い正の相関がみられ ($r = .62, p < .001$)、抑うつ得点と自己注目特性得点との間に中程度の正の相関が得られた ($r = .47, p < .001$)。さらに、抑うつ得点と不安得点との間に比較的強い正の相関が認められた ($r = .74, p < .001$)。

抑うつと不安の間には強い相関が認められた。そこで、この共変関係を統制した上で自己注目との関連を検討するため、偏相関係数を用いた分析を行った (Table 1)。まず、抑うつ得点を共変量とし、自己注目得点と不安得点の偏相関係数を算出した。その結果、自己注目得点と不安得点との間に中程度の正の偏相関係数が認められた ($r = .45, p < .001$)。一方、不安得点を共変量とし、自己注目得点と抑うつ得点の偏相関係数を算出したところ、有意な値は得られなかった ($r = .03, ns$)。

さらに、自己注目を説明変数、抑うつか不安のいずれか片方を基準変数、もう片方をコントロール変数として説明変数に加えた重回帰分析による検討を行った。まず、不安得点を基準変数とし、自己注目得点と抑うつ得点を説明変数とした重回帰分析を行ったところ、 $R^2 = .64$ であり、自己注目からは $\beta = .34$ ($p < .001$)、抑うつからは $\beta = .58$ ($p < .001$) の標準偏回帰係数が認められた。なお、多重共線性の問題について確認するため、それぞれの説明変数について VIF (Variance Inflation Factor) 値を算出したところ、自己注目と抑うつのいずれについても $VIF = 1.29$ であり、多重共線性の問題は存在しないと考えられた。一方、抑うつ得点を基準変数とし、自己注目得点と不安得点を説明変数とした重回帰分析を実施すると、 $R^2 = .56$ であり、自己注目から $\beta = .02$ (ns)、不安から $\beta = .73$ ($p < .001$) の標準偏回帰係数が得られた。なお、VIF 値を算出すると、自己注目と不安のいずれにおいても $VIF = 1.61$ であり、多重共線性の問題は認められないことが示唆された。

以上のように、偏相関係数と重回帰分析を用いた分析の結果から、自己注目と不安の関連は抑うつの影響を統制した上でも認められるものの、自己注目と抑うつとの間の有意な相関は不安の影響を統制すると失われ

てしまうという結果が得られた。

抑うつと不安の併存と自己注目の関連

Clark & Watson (1991) は、抑うつと不安がしばしば併存することを指摘している。このことから、自己注目と抑うつおよび不安の関連を検討する場合には、それぞれの単独の効果のみを取り上げるだけでは現象に十分に即しているとは言えず、両者の併存する場合についても検討する必要がある。そこで、ここでは抑うつと不安の尺度得点に基づいて対象者を群分けし、自己注目の程度を比較した。

群分けの方法を以下に示す。対象者全体の抑うつ得点と不安得点の平均値を基準とし、抑うつ得点と不安得点の両方が平均値よりも高い対象者を“併存群”、抑うつ得点のみが高い対象者を“抑うつ群”、不安得点のみが高い対象者を“不安群”、不安得点と抑うつ得点の両方が平均値より低い対象者を“非抑うつ不安群”として分類した。その結果、分析対象とされた 423 名のうち、併存群に 159 名、抑うつ群に 50 名、不安群に 41 名、非抑うつ不安群に 173 名が分類された。ここで、併存群と非抑うつ不安群に分類された対象者は、抑うつ群や不安群に分類された対象者に比較して数が多く、群間の対象者数のばらつきの大きさが懸案された。そこで、併存群と非抑うつ不安群については、それぞれ 50 名ずつの対象者をランダムに抽出し、分析に用いた。

このような群分けに従い、自己注目得点について、群 (併存群、抑うつ群、不安群、非抑うつ不安群) を要因とする一元配置の分散分析を行った (Figure 1)。分析の結果、群の主効果が有意であった ($F(3, 187) = 17.65, p < .001$)。そこで、Tukey 法による多重比較を行ったところ、併存群は抑うつ群や非抑うつ不安群に比べて自己注目得点が高いが高かったが、不安群との間には有意な得点の違いはなかった。また、不安群は、抑うつ群や非抑うつ不安群に比べて有意に高い自己注目得点を示していた。一方、抑うつ群と非抑うつ不安群の自己注目得点の間には、有意な差は認められなかった (有意水準はすべて $p < .05$)²。

以上の結果をまとめると、不安の程度が高い二つの群 (併存群、不安群) に含まれる対象者は、不安の程度が低い二つの群 (抑うつ群、非抑うつ不安群) に含まれる対象者よりも自己注目得点が高いと言える。しかしながら、抑うつ得点については、その高低によ

² ランダムサンプリングによって群間の人数のばらつきを是正しなかった場合にも、ほぼ同様の結果が得られた。すなわち、群の主効果が有意であり ($F(3, 419) = 50.13, p < .001$)、併存群は抑うつ群や非抑うつ不安群に比べて自己注目得点が高いが ($p < .001$)、不安群との間には有意差はない。また、不安群は抑うつ群 ($p < .01$) や非抑うつ不安群 ($p < .001$) に比べて得点が高いが高いが、抑うつ群と非抑うつ不安群の間に有意差はない。

て自己注目得点の程度にほとんど差がないことが示唆される。なお、併存群と不安群の間には有意な違いが認められなかったことから、抑うつと不安が併存することは自己注目とはあまり関連がないと考えられる。

自己注目と抑うつ・不安の共分散構造分析

最後に、自己注目と抑うつおよび不安の関係を共分散構造分析によって記述し、パラメータの推定とデータの適合についての評価を行った。検討するモデルの作成は、ここまで実施した分析の結果を参考に、以下のとおり行った。まず、自己注目から不安に向けてパスを設けた。偏相関係数を用いた分析において、不安の影響を統制すると自己注目と抑うつの偏相関は有意でなくなってしまうことから、自己注目から抑うつに向けたパスは設けなかった。さらに、不安から抑うつ、抑うつから不安に、相互のパスを仮定した。潜在変数の推定には、それぞれの尺度について負荷量の高い 5 項目ずつを用いた。項目の抽出は、それぞれの尺度について事前に確認的因子分析を実施し、得られた負荷量の大きい順に 5 項目を抽出した。分析には Amos5 を用い、パラメータの推定は最尤推定法によって行った。加えて、修正指標に基づき、 χ^2 値の改善度が 0.1 以上のものについては誤差間に共変を仮定した。

作成されたモデルをモデル 1 とし、パス・ダイアグラムを Figure 2 に示す。分析の結果、自己注目から不安への標準化係数は $\beta=.72$ ($p<.001$) と、中程度の正の係数が認められた。また、不安から抑うつへの標準化係数は $.80$ ($p<.001$) であり、高い値が認められた。一方、抑うつから不安への標準化係数は $\beta=-.11$ (ns) と有意ではなかった。モデル 1 の適合度指

標を算出したところ、 $\chi^2=174.61$, $df=82$, $GFI=.95$, $AGFI=.92$, $CFI=.97$, $RMSEA=.052$ であり、モデル 1 へのデータの適合の度合いはある程度良好であると考えられた。

しかしながら、モデル 1 において抑うつから不安への標準化係数は小さく、有意ではないという結果が得られていた。そこで、このパスを削除したモデルを作成し、モデル 2 として分析を行った。モデル 2 のパス・ダイアグラムを Figure 3 に示す。モデル 2 では、自己注目から不安への標準化係数は $\beta=.66$ ($p<.001$) と、やや高い値が得られた。また、不安から抑うつへの標準化係数は $\beta=.75$ ($p<.001$) であり、高い値であった。このモデルの適合に関する指標は、 $\chi^2=175.16$, $df=83$, $GFI=.95$, $AGFI=.93$, $CFI=.97$, $RMSEA=.051$ であり、モデル 2 のデータに対する適合の度合いはある程度良好であることが示された。データの適合の度合いはモデル 1 もモデル 2 もほぼ同等であったことから、有意でないパスを削除したモデル 2 を最終的なモデルとして採用した。

採用されたモデルから、自己注目は不安にある程度強い影響を及ぼしている可能性が指摘できる。また、自己注目と抑うつ間の相関は、不安を媒介した影響によるものである可能性が示唆された。

考 察

本研究の目的は、抑うつと不安を同時に測定し、自己注目が抑うつと不安のいずれに関連する認知操作であるか検討することであった。本研究において、(a) 単相関では自己注目は抑うつと不安のいずれとも中程度の正の相関を示す、(b) 偏相関や重回帰分析で見た場合、抑うつの影響を統制しても不安と自己注目の間

Figure 1. Comparisons of mean self-focused attention scores for comorbid, depressed, anxious, and non-depressed or anxious group.

には有意な係数が認められる, (c) しかしながら, 不安の影響を統制すると抑うつと自己注目の間の有意な係数は認められなくなってしまう, (d) 共分散構造分析を用いた検討の結果, 自己注目と抑うつ・不安に関するこのような関係性の記述はデータとよく適合するものである, といった結果が示された。

本研究の結果, 単相関を用いた分析では自己注目と抑うつの間には中程度の正の相関が得られていた。このような結果は坂本 (1997) の結果と一致しており, 坂本 (1998) の提唱する理論を支持するものであると言える。しかし, 多くの先行研究によって指摘されている通り (Clark, 1986; Clark & Wells, 1995), 自己注目

Figure 2. Path diagram of relationship among self-focused attention, depression, and anxiety (Model 1).

Figure 3. Path diagram of relationship among self-focused attention, depression, and anxiety (Model 2).

は不安との間にも正の相関を示していた。さらに、不安は抑うつに影響を統制した上でも自己注目と関連があることが示されたものの、抑うつは不安の影響を統制すると、自己注目との間には関連が認められなかった。これらの結果をまとめると、先行研究において指摘されているように、自己注目は不安に関連する認知操作として機能している可能性があると言える。また、自己注目と抑うつ間に認められる相関は、不安を媒介した影響による、見かけ上のものである可能性があると考えられる。以上のように、本研究の結果からは自己注目が抑うつの主要な要因であるとする坂本(1998)の指摘を支持する積極的な根拠は得られなかった。

自己注目と抑うつとの関連を検討した従来の研究では、抑うつのみが測定の対象とされ、不安については測定されていなかった。このことから、従来の研究における、いわゆる“抑うつ強い対象者”とは、厳密には“抑うつのみが強い対象者”と“抑うつと不安が併存する対象者”が混在する集団を指していたと言える。すなわち、自己注目と抑うつに関連があるとする過去の先行研究の結果は、抑うつ強い対象者に数多く含まれる、不安も併存する対象者の影響によるものである可能性が指摘できる。

一方で、抑うつと不安に関連する認知操作に関する研究を概観すると、本研究の結果はそれらの先行研究にある程度合致したものであることが分かる。Heinrichs & Hofmann (2001) や金築・伊藤・山田・境・青山・金井・小山・増田・石川・腰・佐藤・吉田(2002)によると、認知操作には大別して注意、解釈あるいは判断、記憶の三つのプロセスが含まれる。この分類に従うと、自己注目は自分自身に注意を向ける認知操作であることから、注意のプロセスに該当すると考えられる。注意のプロセスの測定には、これまでドットプローブ課題、あるいは情動ストロープ課題といった実験的パラダイムに基づく測定法が多く用いられてきた。このような実験的方法を用いた研究の結果からは、注意のバイアスは主に不安と関連するものであり、不安の影響を統制すると抑うつとはほとんど関連を示さないという結果がおおむね一貫して得られている(Beuke et al., 2003)。本研究において、自己注目が抑うつと関連がない可能性が示唆されたことは、これらの先行研究と一致したものであると考えられる。

以上のように、本研究の結果は坂本(1998)の自己注目と抑うつとの3段階モデルに対して疑問を投げかけるものであり、自己注目は抑うつに直接関与する認知操作なのか、それとも不安を媒介することによって抑うつに影響を与えているのかと論点について、より詳細な検討を行っていくことの必要性を示すものであると言える。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べ

る。第一に、本研究では自己注目の測定法として質問紙を用いている。自己注目を測定するには、質問紙の他にも実験的な方法を用いることも考えられ、このような方法によって測定された自己注目が、抑うつと不安にどのように関連しているか検討する必要があると言える。第二に、本研究では一般大学生を対象者として用いている。したがって、本研究において示された結果が、うつ病や不安障害の診断基準に該当する人の抑うつや不安についても当てはまるかどうかは不明である。このことから、臨床群を対象者とした研究において、本研究の結果は検証される必要がある。第三に、本研究で用いられている抑うつと不安を測定する尺度である SDS と STAI の間には、比較的強い相関が認められている。これらの尺度は、それぞれ抑うつと不安を測定する標準的な尺度であり、十分な信頼性と妥当性が認められているものであるが、本研究のように自己注目が抑うつと不安にそれぞれ与える個別の影響性について評価するためには、より識別力の高い尺度が用いられることが望ましい。しかしながら、抑うつと不安の症状に対して高い識別力を持つ尺度はわが国では作成されておらず、このような尺度の作成・標準化が期待される。第四に、本研究では一時点における調査によって得られた関連データに基づく研究であり、変数間の因果関係について積極的に結論づけることは困難である。その意味で、本論文は自己注目と抑うつ・不安との因果関係について検討するための探索的段階の研究であると言える。このような因果関係を探るためには、縦断的な研究デザインを用いた調査や、自己注目を実験的に操作するなどの手続きを用いた実験データに基づく研究を実施することで、自己注目が抑うつや不安に及ぼす影響を検証していくことが必須であると考えられる。

引用文献

- Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. (1979). *Cognitive therapy of depression*. New York: Guilford Press.
(ベック, A. T.・ラッシュ, A. J.・ショウ, B. F.・エメリィ, G. 坂野雄二(監訳)(1992). うつ病の認知療法 岩崎学術出版社)
- Beuke, C. J., Fischer, R., & McDowall, J. (2003). Anxiety and depression: Why and how to measure their separate effects. *Clinical Psychology Review*, 23, 831-848.
- Carver, C. S., Blaney, P. M., & Scheier, M. F. (1979). Focus of attention, chronic expectancy and responses to a feared stimulus. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1186-1195.
- Clark, D. M. (1986). A cognitive model of panic. *Behaviour Research and Therapy*, 24, 461-470.
- Clark, D. M., & Fairburn, C. G. (1997). *Science and*

- practice of cognitive behaviour therapy*. Oxford: Oxford University Press.
(クラーク, D. M.・フェアバーン, C. G. 伊豫雅臣 (監訳) (2003). 認知行動療法の科学と実践 星和書店)
- Clark, D. M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneier (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment*. New York: Guilford Press. pp. 69-93.
- Clark, L. A., & Watson, D. (1991). Theoretical and empirical issues in differentiating depression from anxiety. In J. Becker & A. Kleinman (Eds.), *Psychosocial aspects of depression*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 39-65.
- Craske, M. G., Rapee, R. M., Jackel, L., & Barlow, D. G. (1989). Qualitative dimensions of worry in DSM-III-R Generalized Anxiety Disorder subjects and non-anxious controls. *Behaviour Research and Therapy*, **27**, 397-402.
- Deffenbacher, J. L. (1978). Worry, emotionality and task-generated interference in test-anxiety: An empirical test of attention theory. *Journal of Educational Psychology*, **70**, 248-254.
- 福田一彦・小林重雄 (1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
(Fukuda, K., & Kobayashi, S. (1973). A study on a self-rating depression scale. *Psychiatria et Neurologia Japonica*, **75**, 673-679.)
- Goldstein, A. J., & Chambless, D. L. (1978). A re-analysis of agoraphobia. *Behavior Therapy*, **9**, 47-59.
- Gotlib, I. H., & Cane, D. B. (1987). Construct accessibility and clinical depression: A longitudinal investigation. *Journal of Abnormal Psychology*, **96**, 199-204.
- Gotlib, I. H., & McCann, C. D. (1984). Construct accessibility and depression: An examination of cognitive and affective factors. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 427-439.
- Heinrichs, N., & Hofmann, S. G. (2001). Information processing in social phobia: A critical review. *Clinical Psychology Review*, **21**, 751-770.
- Ingram, R. E. (1990). Self-focused attention in clinical disorders: Review and a conceptual model. *Psychological Bulletin*, **107**, 156-176.
- 金築 優・伊藤義徳・山田幸恵・境 泉洋・青山幸司・金井嘉宏・小山徹平・増田智美・石川信一・腰 みさき・佐藤さやか・吉田諭江 (2002). 認知行動療法における認知の測定法：情報処理パラダイムに基づく測定法 早稲田大学臨床心理学研究, **2**, 59-68.
(Kanetsuki, M., Ito, Y., Yamada, S., Sakai, M., Aoyama, K., Kanai, Y., Koyama, T., Masuda, T., Ishikawa, S., Koshi, M., Sato, S., & Yoshida, S. (2002). The methods for measuring cognition in cognitive behavior therapy: The methods based on information processing paradigm. *Waseda Journal of Clinical Psychology*, **2**, 59-68.)
- 岸本陽一・寺崎正治 (1986). 日本語版 State-Trait Anxiety Inventory (STAI) の作成 近畿大学教養部研究紀要, **17**, 1-14.
(Kishimoto, Y., & Terasaki, M.)
- Mathews, A., & MacLeod, C. (1985). Selective processing of threat cues in anxiety states. *Behaviour Research and Therapy*, **23**, 563-569.
- Rachman, S., Levitt, L., & Lopatka, K. (1988). Experimental analysis of panic 3: Claustrophobic subjects. *Behaviour Research and Therapy*, **26**, 41-52.
- 坂本真士 (1997). 自己注目と抑うつの心理学 東京大学出版会
(Sakamoto, S. (1997). *Self-focus and depression*. Tokyo: University of Tokyo Press.)
- 坂本真士 (1998). 自己注目と抑うつ——抑うつの発症・維持を説明する3段階モデルの提起——心理学評論, **41**, 283-302.
(Sakamoto, S. (1998). The three-phase model of self-focus and depression. *Japanese Psychological Review*, **41**, 283-302.)
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. E. (1970). *STAI manual for the State-Trait Anxiety Inventory*. CA: Consulting Psychologist Press.
- 丹野義彦 (2001). エビデンス臨床心理学——認知行動療法の最前線—— 日本評論社
(Tanno, Y. (2001). *Evidence-based clinical psychology*. Nihon Hyoronsha.)
- Wells, A., & Matthews, G. (1994). *Attention and emotion: A clinical perspective*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
(ウエルズ, A.・マシューズ, G. 箱田裕司・津田彰・丹野義彦 (監訳) (2002). 心理臨床の認知心理学：感情障害の認知モデル 培風館
- Zung, W. W. K. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.